



講演会・講演要旨

「興味と関心を原動力にみずから学ぶ力を育む  
—博物館で新たな学びを—」

講師：岡部 幹彦 氏

公益財団法人江川文庫理事（元文化庁主任文化財調査官）

令和2年6月30日に予定しておりました東京都産業教育振興会主催の講演会は、新型コロナウイルス感染症の拡大防止の観点から中止としました。講演会の講師をお願いしておりました公益財団法人江川文庫理事の岡部幹彦様に講演要旨をご執筆いただきましたのでご紹介いたします。（事務局）

1 挑戦する学び—《みずから学ぶ力》《考える力》  
そして《実行する力》—

新型コロナウイルスの急激な拡大にともなう深刻な情報が日々飛び交う中、ひとときわ明い話題があった。小惑星探査機はやぶさ2が地球からおよそ3億キロメートル離れた小惑星リュウグウのサンプルを採取し、分離されたカプセルが無事に回収されたニュースだ。

しかし、この壮大な挑戦の成功のおよそ2週間前に、もう一つのロマンあふれる挑戦の成功が報じられていたのをご存じだろうか。「成層圏から奇跡の帰還『思い描いていた映像が撮れた』長野県の高校生の気球8年ぶりに発見」（SBC信越放送2020年11月21日配信ほか）というものだ。旧長野県飯田工業高等学校（現長野県飯田OIDE長姫高等学校）の機械科に属していた8人の生徒たちの快挙だ。

2台のカメラやGPS機能を用いるためのスマートフォンなどを搭載した気球を飛ばし、パラシュートで降下した機材をスマートフォンの位置情報を利用して回収しようとするものであった。残念なことに降下地点が電波の圏外であったため当時は

回収できなかったが、発見され届けられたカメラには、およそ32000メートルの高度からの映像が鮮明に記録されていた。

授業の課題として取り組まれたという。こうした大胆な挑戦的課題を指導した教員の方の指導力も高く評価されるべきと思う。具体的にどのようにこの課題への挑戦が生徒たちによって進められたか詳しい情報を得ていない。しかし、彼らがいくつもの問題解決を図っていることは容易に想像される。機器類をどうするか、機器類の重量と浮力を得るために必要な気球の体積、予定高度まで破裂しない気球の素材や構造、破裂後に自動的に作動するパラシュートの仕組み、回収のための降下位置情報をどうするかなどなど。これらのすべてを高校生が、理論的かつ技術的そして実践的に解決して気球として作り上げるのは想像以上に困難なことであったと思う。そして8年というタイムラグを隔てではあるが、彼らによって練られた綿密な計画が誤っていなかったことが証明された。さらに私はこれらとは別な点でも彼らの計画の周到さに驚いた。それは気球を福井県永平寺町まで運んで飛ばしたことだ。理由は人口の密集地や空港に降下するのを避けるためであったという。機器類に係わる事柄のみならず社会的な影響をも視野に入れて検討を重ねて実行されたのであった。

回収され、映像が確認されたことで、自分たちが成し遂げた挑戦の成功にあらためて大きな喜びを覚えるとともに心の底から湧き出てくるような自信がもたらされたものと思う。

この高校生たちのいくつもの問題解決を積み重

ねる持続的な思考力の強靱さとそこに発揮される高い能力。

こうした課題に取り組む授業があることにあらためて驚くと同時に、彼らが職業学科に籍を置く高校生であることを確認し深く納得できるものがあった。

この8人に限らず職業学科の高校生たちは、日々じつにさまざまな実践を行っている。航海実習や漁業実習、製品や作物の生産実習から新種の開発や品種改良、高付加価値農産物の開発、インターンシップによる実務実習まで、自然や、実際のものや状況を対象としながら、現場での経験を重ね、現場で考え、経験からみずから学んで現場での課題に対応し遂行する能力を身につけていく。彼らの学習の最大の特徴は、いずれも実際のモノやコトを対象とした現場での学びを行っている点である。抽象的な理論や知識のみが求められるのではなく、実際の現場に立ったときに成果を生み出すために必要な能力や技術を身につける学習である。そのためにモノやコトを観察し、考え、計画を立て、シミュレーションを行い、実際に取り組み、経験値を上げてゆく。指導教員などのサポートやアドバイスもあるのだが、あらかじめ用意された「答え」を頭で理解するのはまったく異なるプロセスだ。

自身の高校生活を振り返り、こうした学びを具体的に想像できる人は多くはないだろう。そこでは教科書と参考書と問題集とノートの中で完結する学びではけっして得られない、経験をとおして《みずから学ぶ力》《考える力》そしてそれらを《実行する力》を身につける学びが学校教育の枠組みの中で実現されている。このことこそ職業学科生たちの最大の強みである。気球の高校生たちの示した能力は、こうした学びの集大成と言える。

## 2 疑問という興味と関心—学びの原動力—

《みずから学ぶ力》《考える力》《実行する力》を

学校の正科を離れたところで身につけた高校生が高い能力を発揮した例も少なくない。最初のきっかけは「なぜ」「どうして」という疑問からスタートし、その答えがないからみずから探求する。疑問というかたちで課題を見つけ、解決方法を模索し、その過程で《みずから学ぶ力》《考える力》《実行する力》を身につけ、答えに到達する。少し気をつけていると、こうした高校生たちの活躍が見えてくる。

疑問の答えを見つけ出し国際的な賞を得ただけでなく、さらには企業と共同で世界初の商品化に成功した例がある。愛媛県の高등학교のクラブ活動である。愛媛県立長浜高等学校にある水族館部という珍しいクラブ活動に参加する高校生だ。

カクレマノミがイソギンチャクを住みかになしながらイソギンチャクの刺胞に刺されないのはなぜか。この疑問を探求し、その理由がカクレマノミの体表粘液のマグネシウム濃度の高さにあることを解明。つまりイソギンチャクは海水よりもマグネシウム濃度が低い対象にのみ刺胞での攻撃を行うことを解明したのだ。これ自体が画期的な成果だが、さらに後輩たちが研究を続け、その原理を応用した世界初の《クラゲ除けクリーム》を企業とともに製品化した。高校生レベルを超えたなどというのは、彼女らの探究心の強さを評価していない表現だ。もちろんこのクラブ活動を指導した教員の指導力もあったろう。しかし、教員が答えを持っていたのではない。

ほかにもこの2年間ほどの間にニュースとなった高校生の例をいくつか挙げてみよう。ダンゴムシとワラジムシ。よく似ているのに違いがあることに気づいて小学1年生で飼育を始め、さらに弟の飼うナメクジのケースにはカビが生えるのに、ダンゴムシのケースにはカビが生えないことに気づいた。そしてダンゴムシを11年間研究し続け、高校1年生でフンの中の細菌に防カビ力があることを究明した島根県の高中生。また、セミの成虫の1週間寿命説は

俗説に過ぎず1か月は生存することを、捕獲、マーキング、解放、再捕獲をつうじて証明した岡山県の高校生。住宅地図にも載らず、使われずに放置された古い石橋を調査し、石材を縦方向に組む珍しいリブアーチ型の石橋であることを突き止めた福岡県の高校生。どれもその疑問の解明に注がれたエネルギーは並大抵のものではなく、到達した「答え」もじつに価値のあるものとなっている。

興味と関心をもった対象に対して彼らが発揮し、また、そのプロセスを通じて獲得した能力の高さ。いずれも誰かがあらかじめ用意した「答え」をなぞったものではない。

もちろん仲間や家族や教員のサポートなどダングムシの高校生は島根大学の機材を借りて細菌のDNAを解析一の環境も大いにプラスに働いていることはこれらのニュースからも見て取れる。しかし、「なぜ」「どうして」「どうなっているのか」と問いを重ねて、前進しつづけた原動力は彼ら自身の中にある。誰かに聞いたら答えが返ってくる、答えが返ってこなければそこで終わりということにしていないのは紛れもなく彼ら自身だ。疑問というかたちの興味・関心。学びの大きな推進力を生み出すエンジンである。しかし、ともすると教える側は疑問を解消するのが自分の使命であるかのように思い込んでいないだろうか。ときには疑問をより明確に自覚化させるのも深い学びにつながるサポートである。

### 3 あらかじめ用意された「答え」—教育のイメージ—

生涯学習を考えると、それぞれの興味と関心が原動力となって学びが進む。そう考える私はこうした高校生をはじめ多くの子どもたちの主体的な学びのニュースに接するとメモを残している。しかし、その一方で、みずから学び、みずから考えることと学びとを結びつけることができずに、

あらかじめ用意された「答え」を受け入れることが学びと捉える多くの人々の存在も気になっている。そしてそれは「学習」あるいは「教育」についての誤ったイメージが原因だと考えている。

そこで私は博物館教育を扱うとき、つねに《学び》という言葉を使っている。「教育と学びは同義か否か」といった論点からではない。「教育」という言葉を用いたときに、受け手の多くがほぼ同じイメージをもって受け止めていることに気づいたからである。同じイメージとは、学習すべき対象・内容はつねに整理されて用意され、与えられるものであること、そして教育を受ける側は、それを懸命に努力して忠実に受け入れるというものだ。

なぜこうしたイメージをもつことになるのか具体的に分析する機会を得られずにいる。しかし、多くの人にとっての「学習」あるいは「教育」のイメージは、ほとんど学校教育のみによって形成されているのではないだろうか。確かに学校教育では、学ぶべき事項とそれをどのように理解するかがあらかじめ定められている。そして基礎的な事項を学ぶ初等教育においてはそれがより厳格に行われているように感じられる。

こうした思いは私の個人的な経験によるのだろうか。小学校の理科で昆虫を学んだ。その体のつくりの特徴とともに、卵を産み、幼虫からさなぎ、そして成虫へと変化することを学んだときに、「昆虫にも卵を産まないのもいる。銀バエのお腹には小さなウジが入っている」と、ハエ叩きで潰れた銀バエを紙でつまんで捨てたときに見たたくさんの小さなウジを思い出していた。半世紀も前のことだが、「例外は教えないのだ」と同時に例外を知っていることに少し後ろめたさを感じた。むろん発言などしてはいない。「触れてはいけないこと」と自分の中で処理したことを覚えている。

この授業の進め方に問題あったわけではない。基本や基礎を学ぶとはそういうものだろう。多くの教員の方々が、児童・生徒たちの興味や関心を引

き出し、主体的に授業に取り組めるように心血を注いでいる。そうした個々の教員の方々の努力にもかかわらず、単元や学期ごとのテストや試験、さらには入学試験のための学習が「学習」や「教育」のイメージの形成にもっとも強く関わっているのではないだろうか。試験のたびごとに繰り返された試験勉強の経験が、そして入学試験を突破してきた実績とみずからの学習方法に対する安心感が、試験勉強や受験勉強としての学習を肯定的に受け止める作用をしているのであろう。そうした学習は、求められる模範的解答を準備するためのものであり、学びの力や考える力を育むものではない。

前述した「学ぶべきものはあらかじめ整理したかたちで用意されている」というイメージは、学校教育というよりも、むしろ試験勉強、受験勉強によって形成されているのかもしれない。

#### 4 モノを見ること・モノから学ぶこと

学びのイメージについて記したのは、それが原因と考えられる残念でならないことがあるからだ。博物館・美術館の展示を見る人々の視線の動きだ。展示物の前に進みながらチラとモノに視線を投げかけ、近づいてキャプション（題簽）を読む。解説パネルがあれば、これも丁寧に読む。そして多くの場合、もう一度チラと視線をモノに向けて確認すると、次の展示物へと進む。モノに視線を向けている時間よりもキャプションや解説を読むことに多くの時間を費やしている。展示を見る行為には二つの側面がある。一つは、モノそのものに主体的に向き合い、能動的にこれを見てそこから気づきあるいは感興を得る行為である。そしてもう一つがモノについての情報を得る行為だ。この二つの側面のうち、後者、つまり主として情報を得る行為のみを熱心になさっている方々を私は肯定的に受け入れることができない。むしろ「残念」と感じている。なぜなら、実際にモノそのものを見ることは博

物館でしかできないからだ。

モノそのものを観察しみずから思いを巡らせて気づきを得るよりも、それをどう見るべきかが用意されることを前提として観覧している。熱心に学習しようとする人ほど、熱心に文字を追ひ、そこにあらかじめ用意されているであろう情報をただひたすら受け入れようとする。結果としてモノに意識が向けられていない状況が作り出されている。

博物館・美術館もこうした人々の「ニーズ」に応えようと「努力」している。「説明が少ない、不親切」との指摘を受けてより詳しい説明を用意する。ときにはそれが「文字が小さくて読めない」となり、結果として展示物が説明パネルに主役の座を譲り説明に埋もれてしまう。そうして、観覧者は説明パネルを読むことにいっそう集中し、モノそのものに視線を向ける時間がさらに短くなる。根底にあるのは、繰り返しになるが、学習すべき事柄が整理され提示されていることへの期待にはかならない。みずからのもつ既存の知識とモノそのものを観察することによって得られる新たな気づきをジグソーパズルのように一つ一つ繋いでゆくことに関心が向かない。答えがすぐに与えられないと満足できない。たとえ既存の知識が少なくても、得られる気づきが乏しくても、自由に想像を広げることにはできるはずだ。あるいは「こちらはなんとなく好き」「こちらはつまらなそう」と感じている自分自身を対象として考えてみることも可能だ。モノを見ることはまずはモノと自分との対話なのだから。

博物館でモノを見るよりもキャプションや解説パネルなどを読むことに集中する、つまり整理された情報を得る学習が博物館でも行われている現状について記した。学芸員もまた学術的に整理された情報を正確に分かりやすく伝えることのみを専門職としての使命と考えてしまっていないか。私自身が博物館施設で働き始めて長い間、みずからが専門を学んだ職員として、社会教育施設の職

員として、「より豊かで正確な情報を分かりやすく伝えること」のみを考えていたのも、私自身がそうした教育のイメージを持ち続けていたことにはかならないだろう。

こうした自身の反省を踏まえて、博物館教育を論ずるとき《学ぶ》を用い、「教育とは知識を伝えること」というイメージを払拭しようとしている。実際に今日の博物館での学びは、学びの内容も学び方もじつに多様である。みずからの眼でモノをじっくり観察し、気づきを得て楽しんでいる観覧者も着実に増えてきている。

私は国内外の博物館・美術館に足を運んで自身の目で見るとしている。比較的まとまった日数を取れるようになった退職後は、ヨーロッパの地方博物館を巡り歩いている。既に訪れたことのある大規模博物館も無視はしないが、むしろ地方館で活動が活発な館、展示や教育活動に特色のある博物館に焦点をあてている。

現地で得た情報で訪問先を決めることも少なくない。だから日程も現地で変わる。ホテルもネットと電話で確保する。シニア・バックパッカーと自称する旅である。こうした旅で、ここに記した残念な見方を払拭するための工夫のされた展示に出会った。

主体的にモノと向き合うよう、見えているのではなく、見るためのアクションを求める展示や、キャプションを前面に出さず、何よりもモノを見ることを求める展示。さらに説明をいっさい加えない展示についても紹介しておこう。

## 5 見せない展示と説明しない展示—主体的に学ぶ工夫—

ヨーロッパの博物館は、その歴史が長いだけに、展示にも興味深いさまざまな工夫がなされている。その中で今回のテーマにふさわしい二つの展示方法を紹介しよう。一つは展示品を見えている状態

にして展示をするのではなく、観覧者に見るための行動を求め、行動を起こすことによって始めて見ることのできる展示だ。もう一つは展示品とキャプション・解説パネルとの間に隔たりを作る展示、つまりモノとその情報を離しておく展示だ。したがって、観覧者はまずはモノと向き合うことになり、その後に情報を得ることになる。

例えば前者の展示には、小さくコインロッカーのように仕切られたケースのガラス面がシートで覆われ、観覧者が手の届く距離まで近づいてシートをめくって見るもの。少しだけ隙間を空けた抽斗式のケースに展示品が収められ、観覧者はそれを引き出してはじめて見ることが出来るものなどである（いわゆる収蔵と展示を兼ねる収蔵展示ではない）。通りすがりに離れていても「見えている」ことによって「見た」つもりになってしまうことを避け、まずは観覧者が近づいて、見るための行動をとって「見る」展示である。言い換えれば、観覧者がモノを見るように仕向ける展示だ。

映像展示でもスクリーンやモニターに映っているのではなく、双眼鏡のようなレンズを覗いて見るものもある。

これらの展示に共通するのは、見るための行動をとらせることにより、自然に観覧者が見ることに集中できるように、そして主体的に展示物と向き合うようにと誘うのである。

後者のモノとその情報を離しておく展示の例を挙げると、展示品がなんの表示もなくただ整然と並べられたケース。そしてキャプションや解説はケース下部の抽斗の中のパネルにイラスト付きで記されているもの。あるいは仕切られたケースとケースの間に収納されたパネルを引き出すとそこに解説があるというものなど。

これらの工夫は、まずはモノそのものを予断を排して観察し、観察を通じてみずからの気づきを得させようとするものだ。観覧者の先回りをするように情報を提供することをあえて避けているのだ。

さらには説明をあえてしない展示がある。文字や音声による説明がまったくない。では、説明をせずに何が提供されるのか。それはよく考えられ工夫された体験型の展示物をみずから動かして（場合によりみずからが動いて）体感する、経験することを通じて、不思議さや面白さ楽しさ、自然界にあるものや人間の叡智の素晴らしさに気づくそうした展示だ。

ポーランド出身の偉大な天文学者に因んで名付けられたコペルニクス科学センターという博物館施設がワルシャワにある。2010年に一般公開されてすでに10年を経過するが、予約チケットを持たないと入館できない日があるほどの盛況だ。家族連れから、子ども同士、青年のグループやカップル、お年寄りの団体など、じつに多くの来館者であふれている。そして誰もが一心に体験型の展示に身を乗り出して取り組む姿は、他の博物館ではなかなか見られない光景だ。空間の連続する広い展示室には、400以上の体験型展示物があり、見るだけの展示はごくごく一部分に限られる。文字で知識を与えようとしていない。みずから触り、動かし、体験して、何よりもまず《不思議さ》《素晴らしさ》《楽しさ》をしっかりと感じ取ることに重点を置いた展示である。「わぁっ、えっ、どうして、すごい！もう一度」という声が聞こえてきそうな、夢中で取り組む姿があふれている。

例えば人間の骨格や関節の動きが、来館者が自転車漕ぐとその姿と動きが自転車と平行に置かれたハーフミラーの大型液晶画面に映るとともに、動きをシンクロさせた全身骨格が映し出される。もちろん、その大きさや動き



は自転車を漕ぐ人物に合わせてあり、まるでレントゲン写真を見るようになっている。自転車を漕ぐ動作で骨格や関節がどう動いているのかが一目瞭然であり、関節の自由でスムーズな動きの素晴らしさがわかる。

また別の一画には、浅い2段のプールが作られていて、水車、アルキメデス式スクリュウポンプなど、何種類もの揚水装置があって、来館者がハンドルを手で回して稼働させる。大学生らしい二人の男性が何ごとかを論じ合いながら真剣に取り組む姿もあった。



これらの体験型展示物には、いずれもA4判ほどの大きさの説明ボードが置かれているが、そこに原理や理論の説明はいっさいない。あるのは操作方法の説明のみだ。科学に関する人間の叡智をつうじて、自然と人間双方の素晴らしさ、不思議さ面白さをまさしく説明抜きに体感し、感じ取ることに集中させる。知識を伝えるのではなく、各自の中に興味と関心を目覚めさせることに重点を置いている。

帰国してあらためて近隣の都市の科学館を訪れてみたが、体験型の展示にも背後の壁面にイラスト入りの丁寧な解説がされている。全体として「このことを学習してほしい」という教える側の姿勢が目立つ展示であった。

コペルニクス科学センターの提供する学びは、まさしくみずからが主体的に取り組む、気づきを得て、興味と関心を深める。もちろんそこに「なぜ」という問いも含まれるだろう。自由に出入りでき

るラボもあり、さまざまな機材器具が用意されていて、さらに学びを深めることも可能となっている。

## 6 教える者のいない学び—学びの手法としてのワークショップ—

画一的な答えの用意されていない学習は国外の博物館ばかりでなく国内の博物館でも行われている。その一例として、近つ飛鳥博物館の小学生向けのアウトリーチ（出前授業）の「こぶん人になりきってみよう」を取り上げる。私がこのプログラムを知ったのは20年ほど以前のことだが、同館のウェブサイトを見ると、少しかたちを変えて今でも続けられているようだ。

その進行は、①銅鐸・銅鏡に描かれた絵などを見る、②古墳時代の生活の様子を思いつくまに話し合う、③各児童が話し合いを参考に4コマ漫画に描く、④ストーリーを作り短い劇にする、⑤配役、せりふ、動きを決める、⑥博物館が用意した衣裳や道具を身につけ演じる、⑦博物館への質問、となっている。

古墳時代人を想像するというのは、みずからがその具体的なイメージを紡ぎ出す点において主体的な行為にほかならない。もちろん他の児童の発言に触発されることもあるだろうが、児童たちが銅鐸・銅鏡の絵などから古墳人の生活の様子を想像し共有する。想像は、未知なるものへの興味・関心を育む。想像は、絵をヒントにした自由な気づきでもあるだろう。

この時点で、児童の想像がどれだけ史実に即しているかなどまったく重要ではない。想像というプロセス自体が、古墳人とその暮らしに興味・関心を育む大きな契機となっていることが大切だ。この児童たちは、その後さまざまな形で古墳時代に関する情報にふれるだろう。そのときに、興味と関心が芽生えていた彼らは古墳時代人のことをより豊かに学ぶに違いない。そして誤った想像は

そのときに修正されるだろう。想像が興味と関心を芽生えさせ、興味と関心が主体的な学びの原動力となって学びが進んでゆく。こうした、興味と関心を育む教育をこの例のほかにも多くの博物館が実践している。

あらかじめ用意された答えのない学びについて縷々記してきた。ここであらためてワークショップという学びの手法について確認しておきたい。なぜならこれこそが凝縮されたかたちの「あらかじめ用意された答えのない学び」だからだ。

一般に体験型で何かを作ったり協同で作業をしたりする講座は広くワークショップと呼ばれているが、ここで取り上げるワークショップはそれではない。講師や指導者といった教える立場の人を置かない学びだ。教える側と教えられる側という関係をいっさい作らず、ファシリテーターと呼ばれる司会・進行役のサポートのもとに、参加者自身が学習や問題解決に主体的に取り組むものである。ファシリテーターは結論を押しつけることをせず、先走りすることなく、個々の発言や取り組みに評価を下さず、参加者の学習や問題解決のプロセスを必要に応じて支援する。まさしく参加者の自由で主体的な学びである。

あらかじめ用意された答えどころか、そもそも教える側が存在しないのである。なんらかのテーマに関して、討論や実際の作業や行動をつうじて、参加者同士が経験と知識を共有する主体的な学びだ。参加者自身が《気づき》を得、他の参加者と《気づき》を共有しながら、学びを進めていくものだ。《気づき》の自覚は喜びと満足感を伴い、《気づき》の共有は喜びと満足感の共有でもある。

先の「こぶん人になりきってみよう」も子どもたちの自由な想像を尊重し共有することをつうじた学びであり、大きく捉えるならワークショップとみることもできるだろう。

## 7 まとめにかえて

ここまで見てきたように、本来、博物館は展示活動でも教育活動でも、人々の興味や関心に基づいた自由で主体的な学びを実現する場である。そうした視点であらためて博物館を捉えなおして活用する機運がしだいに高まってきている。とくに若い人たちの学びに関わる教員の方々には、ぜひ博物館ならではの機能を活かした利用を増やしていただきたい。

総合的な学習の時間の段階的な導入が開始された平成12年度は、のちに博学連携元年とされている。ここから博物館と主として小・中学校との間でさまざまな連携事業が展開されてきた。しかし、その多くが教科単元の学習に博物館を利用するかたちであった。これに対して学校と博物館の役割の違いをふまえて、博物館の特性を活かした連携事業を進めようとするさまざまな試みがこの10年ほどの間に徐々に広がりを見せている。

博物館の特性を活かした連携事業については、何よりも教員の博物館理解が前提となることから、教員を対象とした展示解説や説明会も開催されてきた。その代表的な例として《教員のための博物館の日》が挙げられる。国立科学博物館を中心とする全国の博物館・美術館が、博物館に親しんでもらうこと、学習資源としての博物館を知ってもらうことを目的として開催している。今年度は新型コロナウイルスのため、開催館が昨年より減少しているが、昨年度は23都道府県の37の美術館・博物館で開催されている。科学系の博物館も歴史系の博物館も美術館も参加しているので内容は各館さまざまだ。

このほかにも、各館が独自に取り組む教員のための講座や見学会などが実施されているが、中には教員と博物館の継続的な連携から実践事例を開発しようという山梨県立博物館の《かいじむティーチャーズクラブ》というものもある。実践事例と

しては、高校2年生を対象とした「古文書を読む」という出前授業がある。扱われた古文書は離縁状だ。離縁状の性格や甲斐国で離縁状が多い理由の事後学習も行っている。高校生の関心は予想以上であったという。

小学校では今年度から、中学校では来年度から、高等学校では再来年から始まる新しい学習指導要領では、どのように学ぶかとして《主体的な学び》《対話的な学び》《深い学び》が挙げられている。これまで述べてきたように、こうした学びを学校の教室の中だけで達成するのはなかなか困難なことと思う。教室の外に目を向けていただき、博物館という学びの場をぜひ活用していただきたい。

とくに東京都は全国でもっとも博物館の数が多く、また種類も多い地域である。博物館の方でも、新指導要領を意識した新しい学びの方法を教員の方々とともに作り出そうと準備をしている。幅広い興味と関心を、さまざまな学びの可能性を、博物館というモノと向き合う場で広げていただきたい。

### 【おうちミュージアム

#### —おうちでたのしくまなべる—のご紹介

ステイホームが求められる状況の中、全国各地の博物館・美術館およそ220館が参加して、さまざまなアイデアで、ミュージアムを楽しむプログラムを用意しています。ウェブサイトやSNSで探してチャレンジしてみてください。

検索ワード「おうちミュージアム」